

# Rochelle Lieber: *English Nouns: The Ecology of Nominalization*

Cambridge, Cambridge University Press, 2016. ix + 197pp.

---

二村慎一

---

## 1. はじめに

本書は英語の名詞化を包括的に扱い、*destruction*や*assignment*などの動詞派生名詞の意味と統語的な振る舞いを生成文法の枠組みで分析した研究書である。主な目的は二つである。一つ目は、大規模コーパスを使い、先行研究で主張されてきた様々な仮説の妥当性を検証すること、そして二つ目は、コーパスから得られたデータに基づき、新たな分析を提案することである。本書のタイトルとなっている「生態系 (ecology)」が示唆するように、動詞派生名詞 (生物) はあらかじめ指定された意味や統語的な特性を表したり示したりするのではなく、実際の文脈 (環境) に応じて様々な意味や統語的な特性を表したり示したりすることが実証され、そのような柔軟性 (適応) を可能にする名詞化規則が提案される。

本書評の構成は以下の通りである。2節で本書の章立てを紹介し、3節で具体的な主張点と理論的分析を概説する。4節では総評として問題点の指摘と今後の展望を示す。

## 2. 各章の概要

本書は9章立てであるが、主に、導入 (1-2章)、データの検証 (3-4章)、理論的分析 (5-7章)、帰結 (8-9章) の4つに大別され、議論が進められる。

1-2章では、導入として、本書で扱う動詞派生名詞の種類が示され、論点や用語の整理が行われる。また、方法論として、英語母語話者の判断だけに頼るのではなく、大規模コーパスに基づく分析の妥当性が議論される。

3-4章では、the Corpus of Contemporary American English (COCA) を二つの観点から調査し、そこから得られたデータが提示される。一つ目は動詞派生名詞がどのような意味で使われているのかという観点であり、二つ目は事象名詞 (event nominal) や結果名詞 (result nominal) の研究において今まで主張されてきた統語的な振る舞いが、どの程度実際の言語使用において裏付けされるのかという観点である。

5-7章では、コーパスで観察された言語事実がLieber (2004) で提示された理論的枠組みである語彙意味論的枠組み (the Lexical Semantic Framework) を使って説明される。

8-9章では、本書の理論的分析の帰結として、動詞由来複合語、特に、dog attackなどの転換名詞を含む複合語が議論される。ここでも、まずコーパスによるデータの検証が行われ、得られた言語事実が本書で提案された分析で適切に説明されることが示される。最後に、今後の展望が示され、本書の結びとなっている。

### 3. 主な主張

この節では、本研究の主な主張点を概説する。3.1節ではコーパスの調査から得られた新たな言語事実を列挙し、3.2節では理論的な分析を紹介する。

#### 3.1. コーパスによる検証

COCAの調査から判明した主な言語事実は下記の4点であり、実例とともに挙げる。

- (1) a. 動詞派生名詞は文脈に応じて様々な意味を表し、名詞化規則の意味機能は一様ではない。例えば、-er名詞のshooterは一般的な動作主(狩猟者)や道具(連発銃)だけでなく、被動者(獲物)とし

て解釈されることもある。

- b. 様々な名詞化接辞によって表される意味領域がある一方で、その意味領域を典型的に表す名詞化接辞が存在していない領域もある。例えば、事象 (Event) や結果 (Result) の意味は -ation や -ment などの様々な接辞によって表現される (例: organization, establishment) が、場所 (Location) の意味を典型的に表す接辞は存在しない。
- c. Grimshaw (1990) の研究以来、事象名詞と結果名詞の統語的な振る舞いの違いに関して様々な提案がなされてきたが、そのほとんどの提案において反例が見つかり、実際の言語使用においては裏付けされない。例えば、(項構造を持つ) 事象名詞は不定冠詞とは共起しないと仮定されているが、実際は共起可能である (例: a cancellation of debts)。
- d. truck driver などの動詞由来複合語の形成には様々な制約が仮定されてきたが、反例が多い。例えば、主語 (外項) は複合語内には現れないとされてきたが、teacher rating of the experimental children のように、動詞派生名詞の rating と主語相当の teacher とが複合語を形成する例が観察される。

以上、コーパスの調査結果を概説したが、次節では (紙面の制約により) (1a) の言語事実のみを取り上げ、本研究の理論的枠組みでどのように説明されるのかを見ることとする。

### 3.2. 理論的分析

語彙意味論的枠組みでは、接辞を含め語彙の意味は、統語部門に関連する意味素性 (関数) とそれが取る項から成る skeleton という語彙表示で捉えられる。例えば、接尾辞 -er と動詞 shoot の skeleton はそれぞれ (2a, b) となる。

(2) a. -er: [+material,  $\beta$  dynamic ( $[\_R]$ , <base>)] (p. 120)

b. shoot: [+dynamic ( $[\_{<originator>}]$ , [ ])] (p. 133)

-er の skeleton には名詞を表す + material と事象的な意味を保証する dynamic (± は未指定) という意味素性があり、それらが指示対象にかかわる R 項を取る。

そして、baseの位置には基体の skeleton が挿入される。また、shoot は、動詞を表す +dynamic という素性を持ち、それが originator として解釈される外項と（特に意味制限の指定がない）内項を取る。

それでは、-er 名詞の shooter の派生、特にその意味がどのように決まるのかを見たい。派生とは接辞と基体の skeleton を合成させることであり、具体的には接辞の R 項が基体のどの項と結びつくのかを決定し、未指定の素性の ± を決定することである。その両者の決定は R 項の指示に関する (3) の原理と二つの操作、すなわち、基体の素性の値を派生語の未指定の素性が受け継ぐ「素性値の一致 (Feature Value Matching)」と文脈や百科事典的な知識が R 項の指示や解釈一般に影響を与える「文脈的強制 (Contextual Coercion)」によって行われる。

### (3) Principle of Coindexation

In a configuration in which semantic skeletons are composed, co-index the highest nonhead argument with the highest (preferably unindexed) head argument. Indexing must be consistent with semantic conditions (that is, selectional features) on arguments, if any. (p. 100)

例えば、shooter の動作主と道具の解釈は下記の語彙表示から生まれる。

### (4) [+material, +dynamic ([<sub>R,i</sub>], [+dynamic ([<<sub>originator</sub>><sub>i</sub>], [ ]))]

-er

shoot

(p. 133)

-er の dynamic の値は未指定であった ((2a) を参照) が、素性値の一致により shoot の +dynamic から + の指定を受け継ぎ、また (3) の原理により、R 項は shoot の最も高い項、すなわち外項と結びつく。これにより、shooter は shoot の主語に相当する解釈を持つことが保証され、それが動作主なのか道具なのかは文脈的強制により文脈に依存して決定されることになる。

また、shooter は (5a) のような文脈では、被動者 (獲物である bear) の解釈となるが、(5b) の語彙表示から生まれる。

- (5) a. I had taken bears before and had been hunting for several years for a truly outstanding bear, and here one was standing broadside at 20 yards. I didn't have to think twice about this bear. It was a shooter. (p. 133)

- b. [+material, +dynamic ([<sub>R,i</sub>], [+dynamic ([<sub><originator></sub>], [<sub>i</sub>])])] (p.133)  
                 -er  shoot

(4) との違いは、文脈的強制により、R項がshootの内項と結びついていることである。すなわち、文脈から shooter は bear を意味していることが分かり、外項の originator の概念とは合致しないため、この場合の shooter は内項 (shoot の目的語) に相当するという解釈が可能となる。

#### 4. 問題点と展望

最後に、本書の総評として問題点と今後の展望を述べたい。3節で概説したように、新しい言語事実を指摘し、その理論的説明を試みている点は評価に値する。しかしながら、理論的分析には、いくつか不明な点がある。例えば、派生語の指示対象を決める (3) の原理では、「基体の最も高い項が同一指標される」とあるが、実際の選択には文脈的強制が大きいかかわり、(5) のように、違う項が選ばれることがある。そうだとすると、「最も高い」という規定は必要なのだろうか。

また、コーパスの調査から得られた言語事実自体についても更なる検証が必要のように思われる。著者自身も指摘している (pp. 54-55, pp. 181-182) が、(従来) 母語話者の判断と実際の言語使用にはかい離があり、なぜそのようなかい離が生まれるのかの詳細な議論がほしい。それにより、コーパスデータおよびそれに基づいた理論的分析が、より妥当性の高いものになるのではないだろうか。

#### 参考文献

- Grimshaw, Jane. 1990. *Argument structure*. Cambridge, MA: MIT Press.  
 Lieber, Rochelle. 2004. *Morphology and lexical semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.